

## 自閉症児のこだわり行動の理解と対応の仕方の検討

— 交流的スポーツ活動における Y 君の行動から —

### Some considerations and responses to persistent behavior of an autistic child

— From a six-year-old boy's behavior in interactive sport activity —

深代 恵子<sup>1)</sup> 石川 尚子<sup>2)</sup>

*Keiko FUKASHIRO and Takako ISHIKAWA*

#### Abstract

This study describes the case of a six-year-old boy who joins our interactive sport activity which aims to improve emotional balances and developmental problems to the children with mental or physical disabilities. After bouncing a trampoline he offered stubborn resistance against descending from the trampoline and leaving a gym.

The purpose of this study is to analyze the significance of his behavior and consider the ways of treatments to his behavior and the prognosis.

The following are observed in the activities covering one year and half. When his attachment for an assistant was accepted sufficiently or his behavior was less restricted, he maintained his emotional balances and is also easy to follow instructions like descending a trampoline. As it was a temporary improvement, he lost his emotional balance if restriction or prohibitions kept on or increased. His violent behavior like a strong stand against going out of a gym was the most strong one in his resistance and he didn't modified his violent behavior. Though it is considered that his extraordinary persistence and intolerance to restriction against persistence are innate, there might be some possibility that they are caused by his basic anxiety due to the lack of the feeling of acceptance.

**keywords :** *interactive sport activity, an autistic child, persistent behavior*

## I. はじめに

自閉症は重篤な対人性障害であり、周囲の人々に“関係が成り立たない”と思われがちで、彼らの一見理解しにくい行動から“不可解な子”時には“わがままな子”として扱われたりすることが多いのだが、障害に理解のある環境にあっては、小学校入学の頃には周囲の人間と互いにそれほど不都合なく関わる事ができるところまで育つことが多いものである。しかし中にはいつまでも指示行動や集団行動に乗れなかったり、こだわりから抜けられない子もいる。そしてこれらの行動は社会性発達を一層損ない、場を妨害することにもなるので、療育に関わる者にとっては、これが先天的特徴なのか、対応の仕方によっては改善され得るものなのかは大変気になることである。筆者らの研究室では、1982年から心理的援助を必要とする子ども

に対して運動・スポーツを媒体とする治療教育的な活動を継続してきているが、そこに参加した自閉症児たちも、多くは次第に指示行動や集団行動が改善されたが、中にその道を開けない子どもがいて、どうしたら良いのかが強く引っかかることであった。

自閉症研究は、Kannerが1943年に11名の症例に基づき、「早期幼児自閉症：early infantile autism」という名称と、これを対人関係障害とする概念を世に出してから始まった。Kannerの提唱により、はじめは自閉症は母親の養育態度による心因性の障害であると理解されたが、25年後 Rutter (1968) によって自閉症は器質性の言語および認知機能障害が一次障害であって、その結果対人関係障害が二次的につくものであるとされ、さらにそれが1983年に Rutter によって、自閉症の対人関係の障害は言語・認知面が改善されても残るものであり、一次的障害の側面もあると修正されると、それが多くの人々に受け入れられるようになった。現在は、アメリカを中心としては、自閉症は脳の器質的

1) 日本女子体育大学 (教務補助員)

2) 日本女子体育大学 (教授)

障害によって精神機能の発達が部分的ないし広汎にわたって障害されているとされ、ヨーロッパでは、イギリスの精神科医である Wing (1988) による自閉症スペクトラム (連続性) という概念——知的能力や年齢にしたがって個々人の経過は多様で、同一の障害が幅広い症状を示す——が受け入れられているようだが、共にその中心的症候として、①社会性の障害、②コミュニケーションの障害、③こだわり行動、が挙げられている。つまり現在自閉症は、社会的相互交渉 (人との関わり方) の質的障害、コミュニケーションの質的障害 (特にことばの使用の困難)、こだわり行動 (反復的・常同的行動パターン、想像力の障害) などの、治ることのない症候を特徴とする障害であると考えられているのである。

この自閉症概念からすると、指示が入らないとか集団行動がとれないこと、あるいは異様にこだわることは、自閉症の中心的症候と関わることであるから、その改善は先天的な困難を持つことになる。しかしながら、指示が入ることや集団行動がとれることにより初めて社会的学習が可能になり、居場所が大きく広がり、安定も得られるので、自閉症初期発達の援助の場ではこれは大切な課題であるとの認識で根気よく指導されてきて、その結果、質的なおかしさはあるのだがそれほど不都合なく関われるところまでもっていけることが分かってきたのである。例えば、山上の事例研究では、「関係性の障害」に焦点を当てて発達援助的アプローチとともに心理臨床的アプローチをとり、その有効性を明らかにしているし、石井らの実践療育では、自閉症児のこだわり行動や常同行動、食事困難、自傷等に介入しながら情動問題に関わることで人との関わりが改善される結果が繰り返し出されている。

そうすると、みんなが変わっていく中に混じっている幼児期を過ぎ児童期になっても指示行動や集団行動に乗れるようにならない子、あるいは良かったり悪かったりで定まらない子をどう見たらよいのだろうか。これは一次障害のせいなのか、それとも療育のせいなのか改めて問題になる。

この研究は、筆者らの活動に参加してきた、指示行動に乗れず、こだわりから抜けられない傾向を強く示す小1男児 (初来室時) の行動を、特に担当者との関わりの方に焦点を当てて分析し、そこからこのタイプの自閉症児の持つこの困難の意味や理由、および改善可能性について検討するものである。

## II. 対象児の概要

### 対象児 Y 君 (7歳0ヵ月～8歳5ヵ月)

家族は両親と一人っ子の Y 君の3人。父親は温厚そうなサラリーマンで、母親は Y 君をかわいがっているものの、普通の子と違うことをするとついつい口うるさく注意したり、“あんなことして恥ずかしい”と感じたりするタイプで、Y 君への共感に欠けるところが見られた。また、他者と話す時に目をつむったり上を見たりして考えながら話すのが特徴的であった。

Y 君は、言葉は達者で、1歳半検診の時に異常なしの診断を受けていたが、3歳時の入園テストで多動を指摘され、初めて両親は Y 君の行動のおかしさを意識し始めたという。後で思い返してみれば、母親どうしの雑談中にフラフラといなくなってしまうので母は落ち着いて話ができなかつたり、注射を受ける時に「クマチャンが、イタイッテ言ッテルノー！」と泣いて言ったりしたことなど、そういえば何か変だなと思ったことがあった。その幼稚園には多動がひどくて1年間しか在籍できなかったが、入園し直したキリスト教系の幼稚園では、臨床心理士でもあった園長の指導方針のせいかとくに問題になることもなく過ごすことができた。就学時に現在の所に転居し、普通学級に入学したが、集団行動にほとんど乗れないために、学校側の求めに応じて毎日母も一緒に通学して Y 君の様子を見つつ待機することになり、また週1日は通級学級に行くことになった (2年生からは週2日)。普通学級では授業中は自由に大好きな絵を描いていることも多いようである。筆者らの活動を他児の親から聞いて参加を希望して来られたので、石川が面談し、参加してもらうことになった。

## III. 活動の概要

### i) 活動の目的・方針

#### <活動目的>

石川の研究室では、問題児や障害児と個別援助者との心理的交流を核とした療育的な集团的スポーツ活動を『交流的スポーツ活動』として、石川の監督・責任のもとで20年前から行なっている。活動目的は『この場が対象児たちの気持ちの救われる場所や居場所となることによって彼らの情緒の安定がもたらされ、発達上の問題の改善と望ましい学習の成立が目指されるようになること』である。3つのグループがありそれぞれ

れ週1回活動しているが、その1つが自閉症児や知的障害児のグループである。

#### ＜活動方針＞

活動の効果は家庭や学校に現れることが大切なので、援助はするができるだけ日常に近い自然形が保たれるようにする。対象児ごとにその子に必要な援助を行なう個別援助者を付ける（指導を受けた研究室学生）。個別援助者は①基本的に受容的な態度で接して信頼関係を築く。②情緒的に不安定な時には制限は極力せず、やむを得ない時でも子どもの心への影響を考慮した形で行なう。③学習に誘うことが可能な状態であると判断された時には望ましくない行動を制限し、通じるやり方で指導する。④関係性・自発性を引き出すような喜びや楽しみを工夫する。⑤表面的行動に振り回されず、その行動の意味——情緒の状態や対人的な要求や不満——を理解した対応をする。

#### ii) 活動形態とプログラム

##### ＜活動形態＞

自閉症児を中心とした障害児たちと、その個別援助者、およびその他のスタッフが加わった集団活動として、本学の小体育館において行なう。

##### ＜活動プログラム＞

###### ・運動的課題活動

これは、指示を聞ける、みんなと同じ行動ができる、約束事が守れる、場面の認識ができる、身体操作や技能を向上させるなどを目指すもので、対象児たちのレベルや状態に合わせて毎回事前に計画され、当日はリーダー（交代制）によって進行される。主な課題内容は、動作法、リズム運動、ゲーム（識別課題や基本的な動作課題等）、サーキット（各種の遊具・器具を使用）、順番トランポリン（順番を待ち、揺らされたり跳んだりする）などである。ただし、対象児の情緒が不安定な時や課題拒否に意味があると考えられる場合は参加を強制しない。

###### ・自由遊び

自由遊びは、やりたい遊びを自由に行なうことを通して情緒の安定を図ることをねらいとして、活動時間の始めと終わりに設ける。遊具は、活動の場や付設の器具庫に自由に使えるように置いておく。

#### iii) ミーティング、ケースカンファレンス、記録

事前ミーティングでは毎回の活動内容の確認と配慮事項の連絡を行ない、事後ミーティングでは内容・や

り方の反省と検討および次回の計画を行なう。

ケース・カンファレンスは、子どもの状態の診断やその時々適切な対応方法などを押さえていくために、原則として1回に1ケースを事後ミーティングの後で行なった。

活動記録は、毎回の活動後に個別援助者が各対象児について観察記録用紙に記入する。合わせてVTR撮影も行なう。

#### iv) 特別活動

秋の遠足——子どもたちと援助者で動物園等に行く。  
クリスマス会——ゲームや課題発表など。親も参加。

## IV. 活動の経過

深代がY君の担当者であった約1年半の期間を研究対象期間とし、その時の記録に基づいてまとめた。考察部分は、直後のものを半年を経て石川とともに再考察したものである。尚、研究対象期間後もY君に対する関わりは引き続き行なわれている。

### 第1期：#1～#6（全6回；小1. 10月～11月）

初日のY君は、母と石川との面接が終わって体育館に向かう途中、「カエラナクテイイノー」「モットイテモイイノー」と語尾を上げた質問口調で何度も叫び、体育館の中に入ってから周りの遊具やトランポリンに全く関心を示すことなく、ただ頻りにその言葉を大声で叫び続けた。母と一緒に活動を見ていることでもできず、しばらくすると泣き出して暴れ、あまりにも激しく泣くのでそのまま活動に参加することなく初日を終えた。2回目は初回での様子がまるで嘘のように、入室するなりトランポリンにニコニコしながら駆け寄り、周りが課題活動をやっぴょうと遊んでいようとして関係なく、ひたすらトランポリンで1人または担当者と手を繋いで跳ぼうとした。3回目に漸く課題に参加し始めたが、気が向けば入るが指示や制限が与えられると始めのうちはおとなしくされるがままでいても、そのうち抵抗し暴れ出すといった様子で、気持ちは専らトランポリンにあるようだった。

担当者とは始めから遊びの場と一緒にいられ、目を合わせることや簡単な受け答えができたし、自分の要求をしっかりと言語で表現できた。しかしその一方、課題の展開上や活動終了のためにそれまで遊んでいたトランポリンから下りなければならぬ時、顔を歪め

大きな声を上げて抵抗した。まず担当者との信頼関係を築くのが先決であるとする方針に沿って、Y君を下ろす役は他のスタッフがとったが、Y君はその下ろそうとする者に対して手加減なしに蹴りつけた。また、課題活動の順番をじっと待たずにその場に寝転んで騒ぎ出し、暴れて手に負えなくなった。特に活動が終了して退室を促される時が大変で、奇声を発しながら周囲の者を蹴りつけて暴れ、跳んでいたトランポリンから漸く下りてもマットの上で騒いでいるので、仕方なくスタッフが抱きかかえて退室させなければならなかった。

#### <考察>

Y君は他者の声掛けにしばしば無反応、他児と全く関わらない、語尾上がりの質問口調で話す、遅延性エコーリアがあるなどの明白な自閉の特徴を持っていたが、日常生活での言葉による指示理解は可能で、簡単な受け答えや他者と目を合わせることもできたことなどから、当初担当者らは自閉的な壁は薄く、指示や集団行動にもりやすいのではないかと感じ、高機能自閉症だろうと思っていた。しかしその一方で、トランポリンには異様に執拗で、制限されるとひどく抵抗したり、活動終了を受け入れられず大暴れしたので、このアンバランスに戸惑い、またトランポリンから下らないために課題に参加できない現実に困惑した。

#### 第2期：#7～#16(全10回；小1. 11月～2月)

入室するとそのままトランポリンに直行し、課題が始まる時間になっても下りようとする様子を見せずに跳び続けるので、いつも他のスタッフに抱いて下ろされた。課題でバルーンが出てきた時、周りのスタッフが止めるのを振りきってその上へ上がりたがるなどのバルーンへの興味を強く見せたが、バルーン課題に興味はないようで、衝動的にバルーンに上がろうとするY君の肩や腰を持って押さえていなければ参加していられなかった。そしてそのような状態で参加させていると、途中で突然その場に座り込んだり寝転んだりして動かなくなり、抱き起こそうとすると「ア、アーッ！」と声を出し担当者たちを蹴りつけて暴れた。

#9の自由遊びでトランポリンが混んで好きなように跳べなかった時、突然「アノ、ボク、オバアチャンチ行ク」と言って棚の所へ行き、次にボール籠の所へ行って「タマゴノサンドイッチト一、オニギリト一、カップラメント一…オ茶ト一…」などと言いながら小さなボール等の遊具類を選び出し、それらを棚の中

に運んだ。そして1人の世界に入ったかのように「ムシャムシャ」と言って食べるまねをし、食べ終わると「アーオイシカッタ」と言ってままごとらしき遊びを始めた。担当者がその様子に少々戸惑いながらも「先生にも食べさせて」と声をかけてみると、Y君はごく自然に担当者の顔の前に食べ物に見立てたボール等を差し出してその遊びの中に担当者を受け入れたので、しばらくの間そのようなやりとりをしながら2人で遊んだ。トランポリンが空くのをみると担当者を置き去りにしてそちらの方へパッと走って行ったのだが、これ以後、Y君は自由遊びの時間だろうと課題中だろうとお構いなしに担当者にやたらと抱きついたりおんぶをせがんだりするようになった。担当者は課題が行われているにもかかわらずみんなに背を向けてひたすらベタベタと甘えてくるY君に困惑しながらも、それは信頼してくれる結果だろうと思って受け入れていた。そうしているうちにY君は、課題の切り替えでトランポリンから下りなければならぬ時には自分から下りたり、下りたくないのに他のスタッフに下ろされた後すぐに担当者がおんぶしたり抱っこしたりすると、それまで暴れていても割とすぐに笑顔になってギューッと抱きついて落ち着いたり、課題に担当者と一緒にあればちゃんと入るようになるなど、徐々に活動の流れに乗れるようになってきた。

しかし、退室時の抵抗は激しく、担当者や他のスタッフを思い切り蹴るなどして暴れた。抵抗することなくトランポリンから下りて帰る日もあるのだが、多くは暴れて担当者にも見境なく蹴りつけたり、トランポリンから下ろされてからもマットの上でうずくまっていたまでも帰ろうとせず、他のスタッフに無理やり抱き起こされてやっと帰った。当時の担当者は、こんなにも担当者にベッタリと抱きついて甘えるのに、抵抗する時は手加減無しで蹴りつけて暴れるので、Y君の行動と気持ちが理解できずにいた。

#### <考察>

空想遊びというのは、自閉症児がよく行なうものである。彼らにとって我々が自然に行なっている日常生活行動は非常に理解しにくい脅威に満ちたものであるために、それを行なうには苦痛が伴い、そこから逃れたい状態になりやすいと思われるが、そんな時に空想世界で遊ぶことは彼らが安らぐことのできる居場所を与えるのであろうと筆者らは考えている。オバアチャンチの遊びはY君にとってそういう行動であり、このY君の世界に担当者が入ったことで担当者は彼に

とって同一世界の住人となり、そのためにそれ以後は担当者に“安定”を求めようとしてベタベタ甘えるようになったのではないと思われる。担当者はその時はこのようなことを何となく感じたただけだったが、少々戸惑いながらもベタベタ甘えを信頼の証拠のようにも感じて受け入れ、Y君にとっての別世界の規制をなるべくしないようにした。この時Y君がベタベタとくっついてはいるが、課題に入ったり、トランポリンからあまり抵抗せず下りようになったことは、担当者のこの対応の中で気持ちを切り替えることがいくらかできたということだろう。つまり、Y君にとって担当者が安心できる人となったので、その指示に対しては拒否せずに受け入れられるようになり、欲求阻止によるパニックもその抱擁の中に治めることができるようになったのではないかと推測される。

その一方で、退室の際の暴れまくりが治まることできなかったのは、Y君にとって退室するということが、トランポリンで遊ぶことも担当者に甘えることもできなくなるということなので、一層我慢ができなかったということではないかと思われる。

### 第3期：#17～#24（全8回；小1．3月～小2．5月）

トランポリンで跳んでいる時や課題を行なっている最中は担当者に抱きつくことはあまりなくなったが、課題の説明時や順番待ちなどで担当者と一緒に座る場面では、前を向いて座ってもすぐにクルッと後ろに向き直して抱きついたり、ニコニコしながら担当者の髪を撫でてべったりとくっついたりし、前期よりもさらにベタベタくっつくのがひどくなった。ところが、Y君が前を向いて座れるようになる方法はないかと考えた担当者が、体育座りの状態を“たまご”と呼んで「たまごになろう」と言って座らせてみると、割とすんなりその体勢を保つことができた。この時担当者は、もう頑張らせてもよい時期なのではないかと感じた。そこで、課題の時に決まり通りにやらずに好き勝手にしてしまっている行動に少し制限を入れることにした。するとY君はその場に寝転んで動かなくなったり、奇声を発したり、近くにいるスタッフを蹴ったりと大暴れた。退室の抵抗の方は相変わらずで、Y君自身が活動の終わりの時間であると察知した途端にトランポリンの上に小さくうずくまり「オワリジャンナイヨー」と言って下りるのを嫌がったり、退室を渋って暴れた。担当者はどうすればY君がうまく指示に乗れるよう

になるのかをいつも考えていたが、何をしてもうまくいかず、抵抗して暴れるY君が自ら落ち着くのをただ待つしかなかったので、イライラする気持ちと焦る気持ちで一杯だった。

#### ＜考察＞

待ち時間に担当者に抱きついてベタベタと甘えることがさらに増えたのに、トランポリンを跳んでいる時や課題に参加している最中はベタベタしなかったのは、トランポリンは自分の大好きなことであるから必要なかったし、課題をやる時はY君自身の中でやる決定がなされていて、気持ちがそちらに切り替わっていたためだろうと考えられる。反対に課題の説明や順番待ちの時は、好きなように動けないしこれから促されることをやる気持ちも定まっていないという落ち着かない状況であるために、べったり甘えることで安定を得ようとしていたということではないかと思われる。

説明が聞け、順番を待てることは大切だと考えて“たまごになろう”と言ってとり入れた体育座りは、Y君にすんなりと受け入れられたようであったが、これはおそらく、その姿勢と言葉がイメージ的にY君にピッタリ合ったためだろう。また、“たまご”のイメージとこの姿勢自体の持つ機能が、実際に落ち着かせる働きをしたこともあると考えられる。しかし当時の担当者は、Y君の甘える様子から担当者への信頼を強く感じ、また“たまご”で座れたことで指示ののりやすくなったのだと感じたので、ここでさらに、これまで課題には参加するだけでルールは関係なしだった行動にルールという制限を入れてみたのである。Y君がその制限や禁止に大反発し、その場に寝転んで大声で奇声を発して暴れたのは、“好きなようにしたい”のにまた制限されることへの反発だけでなく、味方であるはずの担当者が気持ちを受け入れてくれないことへの怒りと失望もあったのではないかと思われる。このようなY君の気持ちを当時の担当者は感じ取れず、また道が塞がれたと感じてイライラし、焦燥感を覚えたのだが、今振り返ると“そろそろ指示に乗れるようになり、集団行動が取れるようになるだろう”と考えるのはまだ早かったのであり、知らず知らずに普通児を基準とした判断にとりつかれていたのではないかと思う。

### 第4期：#25～#31（全7回；小2．5月～7月）

〔飛び火に罹って体調が悪化し、母親からの「おとなしく寝ていなさい」とか「ちゃんと服を着てなさい」などといった体調管理に関する制限が加わったり、通

院や自宅休養で生活リズムが変化したりしたせい、学校や家庭で状態の悪い日が続いたようである。母親の話では、自分の意に反することがあるとすぐに暴れ、それまで受け入れることの出来ていた制限でも我慢できずにすぐに大騒ぎしてしまうとのことであった。)今はこの活動の中ではなるべく情緒の安定を最優先に考えるべきだろうと判断し、担当者はY君が“たまご”の体育座りをすることを嫌がって抱っこを要求してくれば全面的に許容する姿勢をとったり、トランポリンを使った課題の時に決められた模倣動作を全く無視して勝手に自分の好きなように跳ぶのを認めたりするなど、制限を極力避けるように心がけた。すると、課題の内容の動きではなかったが、大声を出したり暴れ出ししたりすることなくみんなと一緒に課題活動の場に参加できた。しかしそこまで許していても、課題の中でみんなと一緒に並ばせようとしただけで騒ぎ出したし、トランポリンから下りる時はもちろん抵抗するので、かなり受け入れているつもりで担当者はこの対応でよいのかと迷わないではいられなかった。その上、暴れているうちに行動が制限されなくなっても笑いながら面白がるようにさらに暴れ続けたり、担当者を見てニヤッと笑いながら座り込んだり寝転んだりの抵抗を始めるといような行動も出てきたため、どこまでの制限や指示を適用範囲とすべきなのか、どのような制限方法だったら暴れたり騒いだりせずに受け入れることが出来るのかと悩んだ。

#### <考察>

飛び火によって体調が悪化して生活リズムが狂い、それに伴って情緒的にもかなり不安定な状態に陥っていることを考え、制限を極力避けるようにすると、Y君の情緒は保たれたが欲求阻止にはほんの少しも耐えられなかった。このことは、調子の良い時は欲求に浸っていたという本心を我慢できるが、調子が悪化して不安定になると我慢できなくなることを示すようである。そしてここから、前期に指示行動・集団行動ができていたのは、やりたくないことをやるY君自身の努力つまり我慢があったためであり、彼が努力できる状態であったためであることが示唆される。また、暴れながら面白がったり、あるいはニヤッとしてから抵抗し始めるようになったのは、“暴れる”という行動が、最初のうちは制限されたことに対する抵抗反応としての行動だったものが、担当者たちが大暴れの相手をしているうちに、Y君の中で自分の発散の相手をしてもらえる楽しい行動に変わったり、自分の“やりたくな

い”という要求が通った満足を感じさせたり、“これから暴れるぞ”という抵抗遊びを生み出したりになったのではないかと推測される。当時の担当者は、ほんの少しの制限でも受け入れられない時があれば、まるで制限されることを待っているかのように反応する時もあるY君に、一体どこまでが彼に対するよい制限範囲であるのか分からず、混乱していた。

#### 第5期：#32～#38(全7回；小2．9月～10月)

夏休みを挟んで第5期になるとだいぶ落ち着いた状態になった。自由遊び開始合図の信号を待たずにトランポリンに向かおうとするY君に、「赤は止まれだから待つんだよね」と指差しながら信号を意識を向けさせると、「赤ハトマレ青ハスメ」と言うようになり、落ち着いて座って待てるようになった。課題で順番を待っている時に、順番を意識させるために「リーダーの先生に“Y君どうぞ”って呼ばれたら行っていいんだよね」と声掛けをすると、担当者に促されなくても名前を呼ばれると自分から始められるようになった。また、“ボールは1人何個まで”とか“線からはみ出さずに投げる”などの細かいルールを指示せずにY君のやり方を認めると、課題を嫌がって暴れることも少なくなった。ただし、トランポリンから下りることと退室することは相変わらずひどく嫌がって抵抗して騒ぎ、毎回のように、「K君(攻撃的で苦手としている)が来たから逃げよう！」などごまかして下ろすか、隙を見て抱きかかえて下ろすしかなかった。[学校や家庭では『大騒ぎしない』ことを学ばせようとしていて、学校では毎朝Y君に“さわがない”と書かせ、何か気に入らないことがあって騒ぎ出そうとする時には、先



写真 ベタベタ甘えの“ダッコ”



写真 全期を通して見られた大暴れの抵抗

生が「騒がないっていうお約束だったよね」と注意して我慢させていた。家庭では母親が「お約束でしょ」と怒ったが、Y君は聞かず、気持ちを入れ替えることができるまで騒ぐのを止めないとのことだった。]

#### <考察>

再び指示に従えるようになってきたが、これは、制限をなるべく避けて多少自由に行動させる対応を続けたことで情緒が安定してきて、再び担当者を安心を与える人と感じてその言葉が入りやすくなったからのように思われる。トランポリンから下りることや退室することには当然のように相変わらず大暴れの抵抗をしたが、その一方で、「赤は生まれだから待つんだよね」と指差しながら意識させると「赤ハトマレ青ハススメ」と言って待つことができるようになったり、「名前を呼ばれたら行っていいんだよ」と順番を意識させると呼ばれたら自らスタートするようになり、何をするのかの理解がコントロールされた行動に繋がったような場面が出てきた。これは、抵抗や大暴れの原因がどうしてそのようにしなくてはならないのかを理解できないことと関係しているかもしれないことを伺わせるものである。つまり、なぜトランポリンを下りなければいけないのかを彼に理解させる働きかけができないことや、担当者が当時“大暴れすること”と“理解していないこと”とを結びつけることができなかったことも彼の暴れを助長していたかもしれないということである。

#### 第6期：#39～#44(全6回；小2.11月～12月)

以前に比べて情緒的には良くなってきたのにもかかわらず、相変わらず課題に関心を向けずにベタベタと

甘えているばかりなので、このような状態を続けていてもY君が良い方向に変わることはないのではないかと考え、課題の説明を受けている時や順番を待っている時などに、Y君の後ろから両肩に手を置いたり脚を抱え込んだりして、担当者に寄りかからずに前を向いて座らせるようにしてみた。すると、最初は嫌がって身体をくねらせたり足をバタつかせたりしたが、「先生が後ろからY君のことを抱っこしてるんだよ」と言う落ち着いたようになり、2人の身体を連動させて左右にリズムカルに揺らすと抵抗なく揺れた。こうして、課題中のリーダーの説明や順番待ちの時は、担当者の声掛けのみで嫌がることなく再びきちんと体育座りしていただけるようになった。また、リズム体操などの好きではない課題の途中で嫌になって「モウヤラナイ、ヤンナイノヨー！」と言ってその場にしゃがみ込んだり寝転んだりして動かなくなった時に、担当者が「これが終わったら抱っこしてあげるよ」と言うと立ち上がってやるようになった。ただし最後までやり通した後に「頑張ってできたね、えらいね」と誉めても全く聞いていない様子で、すぐに「ダッコダッコ！」と言って抱っこをせがんだ。さらに、トランポリンから下りる体勢にするために、担当者が「しまじろう(Y君の好きなアニメのキャラクター)が向こうで待ってるから行ってみようか」と声を掛けたり、トランポリンで2人で手を繋ぎながら一緒にジャンプして徐々に下りるように誘導していったり、Y君が跳んでいる所を他のスタッフに追いかけてもらい、「食べられちゃうから早く逃げなきゃ！」と鬼から逃げる遊びを利用したりすることなどで、抵抗がなく下りられるようになった。しかし退室を抵抗するのは変わらず、トランポリンから下りた後に騒いでいることが多かった。

#### <考察>

Y君が落ち着いて座っていただけるようにするために、後ろから両肩に手を置いたり脚を抱え込んだりすると始めは当然ながら嫌がったが、「抱っこしているんだよ」の言葉やリズムカルな左右の揺れへの誘導の中で落ち着いていった。これは、「抱っこしているんだよ」という言葉によってこの体勢がY君にとって拘束ではなく“ダッコ”の代償となり得たということであろうし、また動作法の準備動作でもある肩押さえの“興奮や衝動を治める”効果と、身体をリズムカルに左右に揺らすという常動的な動きによる安定の効果もあったことが推測される。そして、嫌になって寝転んでしまった時に「これが終わったら抱っこしてあげるよ」

と言うと立ち上がったことや、ちゃんとやったことに対する担当者の誉め言葉には反応せず抱っこをせがんだことから、“ダッコ”はY君にとって安定を得るための欲求充足行動であるとともに課題活動への動機付けにもなっていることが分かる。また、これまではあれほどトランポリンを下りに強く抵抗していたのに、下りるための誘導の仕方を工夫することで抵抗せずにトランポリンから下りられたことから、興味対象の移し変えや信頼する者との一体感の高まりが頑固なこだわりを緩めるのに役立つように思われた。しかし退室抵抗は変わらなかった。退室するということは、チャンスがあればトランポリンに乗れる可能性も、担当者にくっついていられるのも根こそぎなくなることであり、これだけは受け入れられなかったということであろうから、やはり大事な欲求を阻止されることに耐えられないという特徴は、Y君の根底に強くあるもので、先天的なものかもしれないことを我々に感じさせた。

#### 第7期：#45～#51（全7回；小2．1月～3月）

冬休み後の第7期は、前期の好調が嘘のように多動が戻り、これまではしっかり参加できていた動作法でマットに仰臥することすら拒否して暴れるようになった。自由遊びの時間も興奮気味で、何の前触れもなく突然室内をグルグルと走り回ったり、奇声を発しながらトランポリンを跳んだりした。また、以前にどこかで聴いたことがあるらしい『はたらくくるま』という音楽が課題で使用されてから、毎回入室するとすぐに担当者たちに「ハタラククルマ、キキタイノ」と言ってかけさせ、終わったり途中で止まったりすると「モウチョット、キキタイ、モウチョット」とか、「ナンデソナコトスルノヨー！」と叫び、その音楽が流れていることにこだわった。課題中は「これが終われば“はたらくくるま”聴けるね」と言う落ち着いた座っていられることもあったが、担当者に抱きつかうとして止められた時や、一旦嫌がって抵抗し出した後は、これまで使えた“ダッコ”条件にも“しまじろう”や“たまご”などの言葉掛けにも一切反応しないで騒ぎ続け、その課題が終わり担当者が折れるまで治まらなかった。前期で効果があったトランポリンから下りる工夫も通じなくなり、退室の時間と分かる時担当者がトランポリンに上がるだけでその場に寝転んでしまった。また、暴れて騒いでいる時や自分の欲求が阻止されそうになるのを察知した時、床やトランポリン

の上に唾を吐くようになり、トランポリンから下りさされて退室する時は、担当者におんぶされたまま「先生ノセナカニツバハイタ」と言って唾を吐き、それを母に怒られるとさらに吐いた。

#### <考察>

再びトランポリンから下りるのを渋るようになり、前期でのやり方が全く通らなくなってしまった。これは、トランポリンから下りた後には興味のない課題やそのまま退室しなければならない現実が待っていることを分かっているのに、担当者との一体感よりもトランポリンにこだわる方を選んだということ、つまり、Y君にとってより大事なものは担当者よりもトランポリンだったということの意味しているだろう。課題が嫌で騒ぎ出すと“ダッコ”の条件にも反応しなくなったし、抵抗する時に唾を吐くようにもなったことから、今すぐには与えられない抱っこの喜びを得るために、やりたくないことを我慢してまでやろうとする気持ちが薄れてしまったことが伺われる。唾吐きは自閉症児に多く見られるもので、内面表出行動であると見られるが、Y君は自分の欲求を何としても護りたいという気持ちと、それを阻止する周囲に対する激しい怒りから唾吐きを始めたのであろうと考えられる。このことは、担当者らの工夫につられて本当の欲求から代償的満足の方に移るとか、指示され励まされ期待される社会的行動をやりたくなくても我慢して行なうとかというようなことは、なかなか定着していかないことを示唆するように思われた。

## V. 考 察

### i) 「トランポリンから下りること」「活動の場を終わりにすること」への頑固な抵抗の意味について

Y君はこちらの話が通じたとし、欲求を伝えることも相手の目を見て話すこともできた。何かを喋りながらやっていることがこちらには何だか分からないことも時々ありはしたが、大体は考えていることや状態が分かりやすい子だった。しかし、トランポリンから下りることと活動を終わることに関しては尋常ではない抵抗を見せ、その時は指示が入らず集団行動がとれなかった。つまりY君の場合、指示や集団行動に乗れないのは2つのこだわりが原因であると思われた。一体なぜこの2つをそんなにも受け入れることができなかったのだろうか。



トランポリンを下りる時に尋常ではない抵抗を示す自閉症児は Y 君だけではないし、これまで本活動に通った40名以上の自閉症児たちの多くがトランポリンに多かれ少なかれ執着したので、自閉症児というのはトランポリンにこだわるものであると言いたいくらいである。では一体なぜトランポリンにこだわるのかであるが、トランポリンを跳んだ時の感覚は床で跳んだ時の感覚とは異なり、バネの影響による独特の体性感覚があるし、リズムがあり常同的でもあり、こういう動きは自閉症児に自分の世界を確保させることで安定をもたらしやすいと考えられる。この特徴を考えると、トランポリンを体験した多くの自閉症児がこれにこだわるのは自然なことだと思われる。というのは、自閉症児は自閉的な認知のずれからくる拠り所のなさや不確かさが強いために、そこからくる不安・恐怖から逃れる場を強く必要としていると考えられるからである。長年自閉症児たちと付き合ってきて、筆者らはトランポリン上で揺れたり跳んだりする空間は自閉症児を救う場になっているのではないかと考えるようになっていく。その意味で Y 君の“跳んでいたい”という欲求は十分に納得できる。退室の抵抗はトランポリンのある場を去ることへの抵抗であるとしたら、これも十分納得できる。しかし他の自閉症児と比べて、執拗さが尋常ではないのはなぜなのだろう。

## ii) Y 君の抵抗の意味とその対応について

Y 君はこの2つの抵抗を全く緩めなかったわけではなく、トランポリンを下りることへの激しい抵抗は第3期と第6期には改善をみせている。退室の抵抗の方は基本的には全期を通して常にあったが、たまに機嫌良く退室する日がないわけではなかった。トランポリンから下りることに改善が見られたのは、ベタベタ甘えや抱っこが許された後の時期であり、機嫌良く退室できたのは、トランポリンで遊ぶ他児の数が少なく思う存分跳べた日であった。甘えられつついていられるという別の欲求の充足があったり、トランポリンが十分に跳べるというこだわり欲求自体の充足があった時、2つのこだわりを緩めたということは、仮に前者の甘え欲求充足がトランポリンを跳ぶというこだわり欲求の代償満足であったとしても、とにかくこれらの欲求充足が Y 君の情緒の安定をもたらす、自己コントロールを可能にしたのであろうと推測される。しかし、体調が悪くて母親の干渉が増えたり、担当者がルール遵守的態度を少し強めたりすると改善状態は

たちまち崩れてしまい、長続きすることはなかった。これは、Y 君がこだわり行動を譲ることに担当者らは安定と成長を見たが、Y 君の方からすると精一杯の我慢があって、それに慣れるよりは隙あらば欲求に戻る方向に常に心が向いていたということだろう。このようなことから、強いこだわりと、欲求が阻止されることに対する耐性のなさが根底にあること、つまり一次的障害であることが暗示される。しかし同時に、情緒の安定が護られていないということもあり得ると思われる。もし後者だとしたら、本活動における子どもたちへの対応方針は共通したものであるし、ほとんどの子どもが安定化に進み、こだわりを緩め、ちょっと変だがそれなりに指示行動・集団行動をとれるのであるから、Y 君の不安定のもととは本活動以外のどこかにあることになる。筆者らは、自閉症児は日常生活で情緒不安定になりやすいからこそ何かにこだわることで安定を得るというパターンを固着させるのではないかと考えるのだが、だとすると Y 君の場合、家庭や学校という Y 君にとっての大事な場所で彼の気持ちが受け止められていないことによる基本的な不安定があり、その不安定度が強い時ほど安心を求めて強くトランポリンにこだわることになるのではないかと気がする。ではこの尋常でないこだわり方をコントロールしていけるようになることに対して、我々の活動は役立つことができるのであろうか。

## iii) 抵抗行動と理解の関係について

第5期に、自由遊び開始合図の信号に対して「赤ハトマレ青ハススメ」と言ってそのルールに沿って行動をコントロールしたり、課題で「名前を呼ばれたら行っていいんだよね」と言われた後で名前を呼ばれるまで待ち、呼ばれると自分から始めたことがあった。これらのことは、手に負えないような大暴れの抵抗の原因の中に、“分からない”もあることをほのめかすようである。つまり Y 君がトランポリンを下りないのは、下りなければならないことを分かっていないからであり、分からせていないからでもあり得るということである。一般に、自閉症児に関わる場合、周りは大抵理解させようと懸命に努力し、それが功を奏しないことで自閉症のこだわりは取れないと判断することになるのだが、理解させるべく努力する事柄と、彼らが理解できることがすれ違っている可能性がある。すなわち、周りは健常者の世界の論理を彼らにも共通するものとして関わるのだが、共通ではないと考えた方がよいか

もしれないのである。それはまた、もし彼らの理解できるような働きかけ——それはおそらく彼らの側の世界の基準、つまり彼らの認知世界の基準ということになろうが——ができれば、理解ができて行動が修正される可能性はあるのではないかと考えるということである。これは健常者側の能力を越えるかもしれないが、探求すべきことであり、まさに我々の活動の課題であるように思える。

## VI. 結 び

多くの自閉症児は指示や集団行動に乗れるようになっていくのに、Y君はこだわり欲求の充足とかそれに代わる欲求の充足によって一時的にはこだわりを緩めて指示や集団行動に乗れるようになっても、それが定着することはなかった。それはトランポリンという自分の空間や世界を確保させてくれるものを他の自閉症児よりも強く必要としているということ、つまりそれだけ他の自閉症児よりも情緒的安定が護られていないことを暗示しているようである。この基本的不安定が先天的なものであるか、主として両親との関係で出てきているものなのかは分からないが、少なくともY君の大暴れ抵抗の原因の1つには彼が状況を理解できていないという問題がある可能性があるわけだから、彼の認知世界の基準に合った働きかけをしていくことが、Y君の不安定の改善に関わる上で我々の大きな課

題となってくるのではないと思われる。

### 引用・参考文献

- 1) Attwood, T. (1998): Asperger's syndrome A guide for parents and professionals; 富田真紀・内山登紀夫・鈴木正子訳 (1999): 『ガイドブック アスペルガー症候群 親と専門家のために』東京書籍
- 2) 平井信義編 (1982): 『こだわりをとく 常同行動・固執からの解放』自閉児指導シリーズ2 教育出版
- 3) 石井哲夫・白石雅一著 (1993): 『自閉症とこだわり行動』東京書籍
- 4) 石川尚子著 (1998): 対流的スポーツ活動の場に展開された自閉症児の行動—その特徴と変化—; 日本女子体育大学紀要29巻
- 5) 大野清志・村田茂編 (1993): 『動作法ハンドブッカー初心者のための技法入門—』慶應義塾大学出版会株式会社
- 6) 杉山登志郎・辻井正次 (1999): 『高機能広汎性発達障害 アスペルガー症候群と高機能自閉症』ブレーン出版
- 7) Williams, D. (1992): Nobody nowhere.; 河野万里子訳 (1993): 『自閉症だったわたしへ』新潮社
- 8) 山上雅子著 (1999): 『自閉症児の初期発達 発達臨床的理解と援助』ミネルヴァ書房

(平成13年9月21日受付)  
(平成13年11月26日受理)